食の考古学５

動植物遺存体から食文化を考える

―堀河院跡の調査事例から―

http://www.kyoto-arc.or.jp
(公財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

図１　堀河院跡出土の植物遺存体（一部の種は除く）

はじめに　私たち現代人の食事はバリエーションが豊かで、食材も国内外から取り寄せて調理され、食卓には様々な料理が並びます。しかし、このような食文化が形成されたのは幕末の開国以降、特に空と海を使った輸送技術が向上した戦後のことです。

それでは日本の食文化はどの様な変遷を遂げてきたのでしょうか。平安時代後期から江戸時代の遺構の土を篩(ふるい)に掛け、抽出した種実類(以下、植物遺存体)と出土した生物の骨(以下、動物遺存体)を分析した平安京左京三条二坊十町・堀河院跡(以下、堀河院跡)の事例から考えてみたいと思います。

堀河院跡　御池通堀川の北東に所在する遺跡です。この場所は９世紀後半には、藤原基経が造営した邸宅（堀河院）があり、10 世紀中頃に円融天皇が里内裏（仮の御所）とし、11 世紀後半から 12 世紀初頭には白河天皇と堀河天皇が里内裏とします。中世以降には貴族の久我(こが)氏の屋敷地であったと推定されており、桃山時代には豊臣家家臣の邸宅となります。その後江戸時代初期の元和９年（1623）に老中・土井利勝が拝領し、幕末まで土井家が所有する土地でした。では、2006 年から 2008 年にかけて実施した発掘調査で出土した動植物遺存体のうち、食利用の可能性が高いものを中心に、時代順に見ていきましょう。

平安時代後期　白河天皇、堀河天皇が里内裏としていた時期の遺構からは、ヤマモモ、クルミ類、キイチゴ属、モモ、ウメ、スモモ、カラスザンショウ、ブドウ属、シソ属、ナス、メロン類、アブラナ科（ダイコンやカブ、ワサビ等の野菜を含む科）が出土しており、メロン類は 35%、ナスは 17% でこの２種が半数を占めます（図２）。このうち、庭園に植栽されるモモやウメ等には観賞用と食用の性格があると考えます。同時期の遺構から出土した動物遺存体にはウシまたはウマの歯がありますが、牛馬を食べていたかについては分かりません。労働力として使役していたことは間違いないでしょう。

中世　久我氏の邸宅と推定される時期の遺構からは、ヤマモモ、ムクノキ、クワ属、コウゾ属、キイチゴ、ウメ、ザクロ、カキノキ、アサ、アブラナ科、シソ属、ナス、ゴマ、メロン類、イネが確認できます。この時期の植物遺存体を分析した遺構

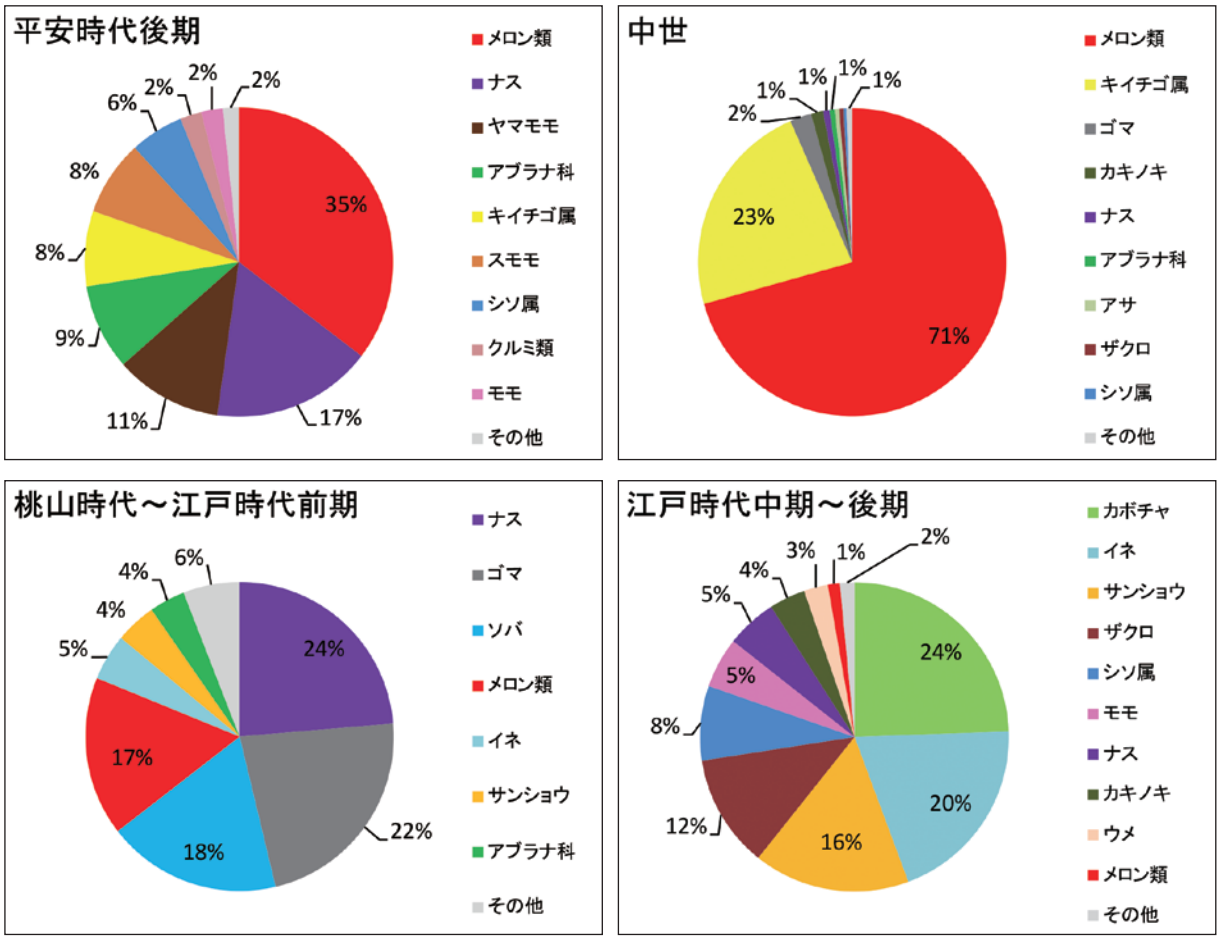

図２　堀河院跡から出土した食用の可能性が高い植物遺存体割合（５点未満はその他に分類）

は９基ありますが、食用と考えられる植物遺存体の約99％が１基の遺構から出土しており、調理で出た廃棄物を捨てるゴミ穴や排泄物が溜まるトイレ等の可能性も考えられます。この遺構からは大量のメロン類とキイチゴ属が出土しており、全体の９割以上を占めます。また、この時期になると明らかに食用と考えられる動物遺存体として、魚類のアジ科、アユ、コイ、サケ属、タイ科、ベラ科、ボラ科、貝類のシジミ、ハマグリ、アカニシ、哺乳類のイノシシ類が出土しています。

桃山時代～江戸時代前期　豊臣家家臣から土井利勝に土地の所有者が変わる頃には、キイチゴ属、ウメ、サンショウ、トチノキ、ザクロ、カキノキ、アサ、ソバ、アブラナ科、シソ属、ナス、ゴマ、メロン類、イネがみられます。メロン類は大量に出土した中世からは割合が減り、ナス、ゴマ、ソバで６割以上を占めます。動物遺存体は貝類のアカニシ、鳥類のニワトリ、アビ科、哺乳類のイノシシ類、ニホンジカが出土しています。

江戸時代中期～後期　この頃の遺構からはクリ、モモ、ウメ、アンズ、サンショウ、ブドウ、ザクロ、カキノキ、シソ属、ナス、メロン類、カボチャ、イネが確認できます。メロン類は割合が大きく減ったほか、16世紀に日本に伝来したと言われるカボチャが18世紀の遺構で初めて確認できました。動物遺存体では貝類のシジミ類、ハマグリ、魚類のボラ科、マダイ、ハモ属、ブリ属、マグロ属、貝類のアカガイ、アカニシ、バイ、アワビ類、ハイガイ、フネガイ科、鳥類のカモ科、ニワトリ、哺乳類のイノシシ類、ニホンジカ、ヤギまたはヒツジが出土しています。

おわりに　堀河院跡ではキイチゴ属やウメ、ナス、メロン類が常に確認できる一方で、サンショウやソバは桃山時代以降にみられ、クリ、ブドウ、カボチャは江戸時代中期以降にみられます。食用とした動物遺存体は中世から確認できるようになり、以降は種が増加します。この傾向が時代的背景によるものか、はたまた居住者の違いによるものかは、堀河院跡の一事例だけではなく、他の遺跡と比較して考える必要があり、同様の調査を地道に、面的に広げて比較材料を増やしていくことが重要です。今後の調査成果の増加にご期待下さい。

（関　晃史）